

である。

長谷川先生のお話では生誕一〇〇年祭は行われなかったという。没後一〇〇年祭はあと三年であるが、先生はその時元気に参加できないかもしれないといわれた。矢数先生も長谷川先生の御意見に同意され、そこで、筆者が先生の命を受けて、日本東洋医学学会に共催の同意を、同じく大塚先生が医史学会の共催の同意をそれぞれとり、最終的に日本医史学会、日本東洋医学学会、東亜医学協会の三団体の共催となったのである。

なお、申し上げるまでもなく、長谷川弥人先生は浅田宗伯直門の木村済生塾に学んだ唯一の現存者である。また先生は浅田宗伯著作集研究の第一人者である。

本記念祭を開催するに当り、会場および懇親会のお世話をいただいた順天堂大学医史学研究室の酒井シヅ先生、蔵方宏昌先生、事務担当者、また会場設営陳列に御尽力いただいた大貫進、小曾戸洋、真柳誠の各先生、また事務一切を担当された土屋伊薩雄氏に深甚の謝意を表する。

(菊谷 豊彦)

蘭学の巨星 杉田玄白・緒方洪庵展

「蘭学の巨星 杉田玄白・緒方洪庵展」は一九九〇年五月二一日(月)から二六日(土)にかけて、丸善・東京日本橋店四階ギャラリーAで開かれた。主催は蘭学資料研究会(略称は蘭研)、後援は国立国会図書館、適塾記念会、緒方医学化学研究所、協賛

は丸善である。

蘭研会長の故緒方富雄氏(一九八九年三月三一日死去)の一周忌にあたり、本展覧会が催された。緒方会長は、生前、曾祖父の緒方洪庵および、杉田玄白の関係史料を収集され、その多くが、緒方医学化学研究所に収蔵されていた。今回の展示は、緒方医学化学研究所からの出品の他に、個人、法人の方からの出品によるものである。

出品者は、個人では、緒方惟之、緒方正美、緒方洪章、堀内淳一の諸氏、法人は、日本学士院、国立国会図書館、適塾記念会、研医学会図書館、日本医学文化保存会、順天堂大学図書館、緒方医学化学研究所である。

展示は、「杉田玄白と弟子たちの遺品」として玄白の遺墨・書簡・著書、弟子達の遺墨(杉田成卿、桂川甫賢、坪井信道、宇田川榕菴たちの書画)が一つのコーナーとなっている。また、「シーボルト関係」として国立国会図書館の史料が展示された。さらに、蘭学時代の「辞書」のコーナーが設けられた。これらが展示の一つの柱である。

もう一方の柱は「緒方洪庵」関係の展示である。洪庵、夫人の肖像、洪庵の著作、訳述の医学書を中心とした刊本、稿本類、洪庵の書簡、日記、和歌、歌稿集。さらに、適塾関係史料が展示された。

本展覧会では、出品目録(解説)のパンフレットがつくられ、見学者には、無料で配布された。実行委員は、蘭研会員の有志であり、杉本 勲氏が代表となり、石山 洋、片桐一男、酒井シヅ、

向井 晃、安岡昭男、矢部一郎の諸氏が参加した。緒方医学化学研究所の多大な協力をいただき、同所員の旧蘭研事務局員であった田中、宮崎さんには、大変御迷惑をかけた。この展覧会の実現には、代表の杉本氏の熱意と、多忙な中、動かれた酒井氏、緒方研の田中さんの御苦勞によるものである。

展示の仕方としては、展示品が多すぎて、ごたごたしないように、書物関係が多くて、古本屋のようにならないように気を付けた。また、一般見学者のため、視覚的に関心をもってもらえる展示を心がけた。肖像画等の書画、地図、適々齋塾の模型などである。それなりに目的は達成されたようである。

見学者は、予想以上に多かった。日本橋の丸善の地のりが良かったようである。丸善に買物にこられた方々、近所の会社の会社員の方々などである。昼休時の混雑は大変なものであり、サラリマン諸氏が、昼食前後に、見学に来られたようである。知的好奇心に敬意を表したものである。洋学史研究者の一人としての私は、大変嬉しかった。また、実行委員の一人片桐氏の青学大での受講生が多数見学に来て、片桐氏が、学生たちに解説されていたのは、一つの見物であった。ちなみに、私は、この展覧会について、私の講義の受講生に宣伝したが、来てくれたのは、数人であった。

本展覧会開催の目的には、もう一つのものがあった。蘭研閉幕にあたって、けじめをつけようということである。展覧会の最終日の五月二六日（土）午後一時から、蘭研五月例会と総会が、順天堂大学九号館一番教室で開かれた。向井晃氏の司会で、酒井シヅ「洪庵と医学」、片桐一男「杉田玄白について」、石山 洋「蘭

書発見の頃」という講演があり、総会で、杉本 勲氏の司会・議長により、蘭研閉幕が承認された。

蘭研は、一九五四（昭二九）年に、上野図書館で、江戸幕府旧蔵洋書が発見されたことを契機に発足した研究会である。緒方富雄氏が会長となり、現在に至ったのである。機関誌『蘭学資料研究会研究報告』の毎月発刊、月例会、大会（年一回）、展覧会の開催など、戦後の洋学史研究の中心的存在であった。

しかし、会長が、一人で采配をとり、十分な組織がなかったのも、会長が老齢となられ、また、病床にありがちとなると、会の活動が弱まり、昨今は、完全に停止していた状態であった。閉幕はいたしかたなかったと思う。今後、洋学史研究者たちが、一堂に集まる可能性があるが、将来のことである。学会、研究会は、蘭研の轍をふむことなく、近代的感覚で、民主的な運営を心がけるべきであらう。

最後に、実行委員の一人として、出品者の方々、後援の諸機関、協賛の丸善に感謝の意を表したい。また、本展覧会ばかりでなく、長年、蘭研のため、はたらいて下さった、緒方医学化学研究所の田中、宮崎さんに心から感謝したい。蘭研の歴史については、『蘭学資料研究』附巻、龍溪書舎（一九八七年刊）を参照されたい。

（矢部 一郎）